

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2017年10月2日発行 No.48

『そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。』
(新約聖書 フリピの信徒への手紙 2:1~2)

<週明けキリスト教センターに衝撃が走る!! 神戸教区新主教 小林尚明主教がKIUを電撃訪問!!>

先々週の土曜日、神戸のミカエル大聖堂で「主教按手式」が行われた事は裏面のお話の要約に記してありますが、その翌週月曜日!! 新しく神戸教区の主教に就任された小林尚明主教がKIUを訪問して下さいました!!!! お昼の礼拝にも出席され、学生が多く集まっている様子に驚いておられました。教会とキリスト教学校は、宣教の課程において重要なパートナーであると言えます。神戸教区で新しく指揮を執られる小林主教、ぜひこれからもKIUをよろしく願いいたします!! m(_ _)m



総裁主教&英国主教と並ばれる小林主教 大きな聖堂が笑顔で満たされました KIUの昼礼拝で黙想される主教

<9月は自らの足元を考える時…。多くの教職員・学生と共に学院創立記念礼拝を挙行!!>

日本聖公会の教会暦によると9月の29日は聖ミカエルおよび諸天使の日と定められています。学院創立者の八代斌助師父の洗礼名がミカエルであったことから、この大学もSt.Michael's(聖ミカエル)の名が付けられています。そのような繋がりから、先週木曜日の午後15:10から大学チャペルで創立記念礼拝が執り行われました!! 昨年よりも多くの参加者が与えられた喜びを胸に、皆で心を合わせて聖歌を歌い、祈り、そして前学長である遠藤雅己先生のメッセージに耳を傾ける…。わずか20分にも満たない短い時間ですが、私学の独自性や使命の明確化が重要視される時代に有意義な歩みを記す事ができたように感じます。お忙しい中、ご参加下さった皆様に心から感謝いたします!!



50名を超える参加者に感謝!!

賛美の歌声も高らかに響く

学院創立の意義を語る遠藤前学長

<先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています。

9月25日(月) テーマ:「新しい歩みに添えて」

野間 光頭(チャプレン)

長かった夏休み、私の中で最も強く印象に残っているのが「全国聖公会関係学校協議会」に出席した事だ。これは、聖公会につながる全国の学校の教職員が一堂に会して開かれる研修で、今年は東京の聖路加国際大学を会場に行われた。今回のテーマは「聖公会のミッションの具現」、様々な問題を抱える現代社会において、聖公会関係学校にどのような使命・働きが与えられているかを考え、話し合ったが、そこで再確認したのが「神を畏れ 人を恐れず 人に仕えよ」というKIUの建学の精神、八代斌助師父の言葉であった。後期という新しいスタート、今一度、この言葉を胸に刻んで歩みたい。

9月26日(火) テーマ:「人生で大切なこと」 ~「今という時」そして「出会い」~

武政 誠一(リハビリテーション学部長)

日本人は、平均寿命が急速に伸び現在100歳以上の人口が全国で6万5千人を超えている。生命、命を考えた時、2つの事を感じる。1つは、時間だけでなく健康に生きる意味の寿命もあるという事。だからこそ、「今」という時間を充実させ大切に生きたい。今という、二度とない時を大切に楽しく生きて欲しい。2つ目は、人には誰でも生まれてきた価値があるという事。どんな人にもこの世で果たすべき役割がある。その天命にいつ、どのように気付くか? 自分の天命・使命とはなにか?それをたくさんの行動と出会いによって掴んで欲しい。一回しかない人生、アグレッシブに挑戦しよう!!

9月27日(水) テーマ:「リーダーの矜持」

野間 光頭(チャプレン)

9月23日、神戸のミカエル大聖堂で「主教按手式」が行われた。これは新しい神戸教区の主教が誕生する意味を持つ大切な礼拝で、当日は全国から500人以上の参加者が集まり喜びの時を共にした。特に印象的であったのが、説教を担当した英国聖公会主教ジョン・ハインド師父の言葉だ。「大きな力を持つ主教に求められる基本姿勢は、全ての教会信徒の司牧者として、その一人ひとりの命に仕える事である…」思えば昨今の世界情勢の混乱は国を率いるリーダーの仕える姿勢、謙虚さの欠如によるものではないだろうか? 改めてKIUの土台に据えられた「仕える」の文字が心に響いた。

9月28日(木) テーマ:「弱さと強さ」 ~遠藤周作「沈黙」から~

近藤 剛(経済学部)

キリスト教作家の遠藤周作の代表作「沈黙」が昨年映画化された。M.スコセッシ監督が28年の構想を経て映像化した事から話題になった。イッセー尾形や窪塚洋介ら日本人俳優の演技も素晴らしかったが、その創作の出発点が短いエッセイに記されている。「歴史からも黙殺された弱者の抱える後悔や恥、悲しみや苦しみに私は無関心ではいられなかった…」今日の聖句、イザヤ書には苦しみを抱える者と共に寄り添い共に歩む「苦難の僕」というモチーフが示されている。今、世界には勇ましい救済ではなく、もっと慎ましく、しかし本当の意味で力強い、寄り添いと励ましが求められている。

9月29日(金) テーマ:「夏休み、楽しかった事、学んだ事は何か」

石原 正彦(リハビリテーション学部長)

この夏、私は病気をして人生で初めて手術を受け1ヶ月間入院した。手術後病室のベッドで目覚めると、様々な管や機械がつけられ全く身動きが出来なかった。そのような時、看護婦さんの優しい対応に何度もお世話になった。このような対応の理由を考えていると、病院の理念「患者さんのために」という言葉が掲示板に貼られており、また引継ぎの場面でも「看護師の心得」を口唱していた。看護師さんが寄り添ってくれるから患者は安心して病気の回復が出来る事を知った。今日の聖書箇所マタイによる福音書の7章12節『人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。』を実感した。今日の聖書の箇所は将来患者と向き合うリハ学部の学生はもちろん、経済学部の学生にとっても相手の気持ち、希望を察することは重要であると思う。

(文責:野間 光頭)